

展勝地風土記

Vol.4

平成25年4月26日
展勝地開園100周年記念事業準備委員会
問い合わせ／北上市都市整備部都市計画課 ☎72-8279

展勝地開園100周年記念事業準備委員会では、100周年に向けた取り組みとして、より多くの市民に展勝地を知っていただくため、展勝地に関するさまざまな情報を紹介しています。歴史的なこと、地理的なこと、自然環境のこと、そして、展勝地に深く関わった人々や展勝地を題材にした美術・文芸作品などについて紹介していきます。

黒岩の謎の巨石群

言い伝え

展勝地から北に5kmほどの黒岩小学校のそばに白山神社がある。この神社は、もともとは白山宮と呼ばれていたらしく、その麓にいた管理者である別当が白山寺と称したという。そして、その周辺には平泉から四十九里目の距離を示す「四十九里」や仏像の大きさを示す「丈六」、「寺内」などという仏教関係の地名、さらには「鍛冶屋」などの屋号を持つ家が、かつてはあったらしい。

白山神社とは、加賀白山(石川県)から勧請(かんじゆ)神仏の分霊を別の地に移し祭ることとされた神社であり、鍛冶などにも深いつながりがある。また勧請年代を示すと思われる12世紀前後の仏像や神像が、今に伝えられている。

その白山神社の参道脇に、巨大な石が数個置かれている。これらの石

はどこから来たのか、そして何なのか、今は白山廃寺跡と呼ばれるこの遺跡について少々考えてみたい。

戦後ぐらいまでの周辺

戦後ぐらいまで、丈六堂跡や三十三間堂跡と呼ばれる地区があったらしい。先にも述べた丈六とは、坐像であれば2・5m前後、立像であれば5mほどの大型仏像を示す用語であり、当然のこと、丈六仏を安置した丈六堂ともなれば、その大きさもうかがい知れるというものだろう。また三十三間堂とは、言うまでもなく京都にある通称三十三間堂、すなわち国宝蓮華王院のことであり、中には千体にも及ぶ千手観音菩薩が祭られている。

ということは、建物の土台石が昭和まではそれなりに残っていたので

ある。丈六堂跡というからにはかなり大きな石が、三十三間堂跡という表現からは、それなりの数の土台石があったと考えられる。ところが現在、周辺を探索すると、地面に収まっているものは数点しかなく、建物跡の痕跡の様相は呈していない。つまり多くの土台石は、掘り出されてしまっているのであった。

謎の巨石は土台石

掘り出された土台石は、2カ所に集められている。1カ所は丈六と呼ばれたという地区で、もう1カ所が白山神社の参道脇である。しかし両方で10個程度なので、地下に埋められたものも少なくないと考えられる。

土台石を測ると、不整形ながら1mを超すものもあり、非常に大き

平泉町役場 八重樫 忠郎



白山廃寺跡の土台石群

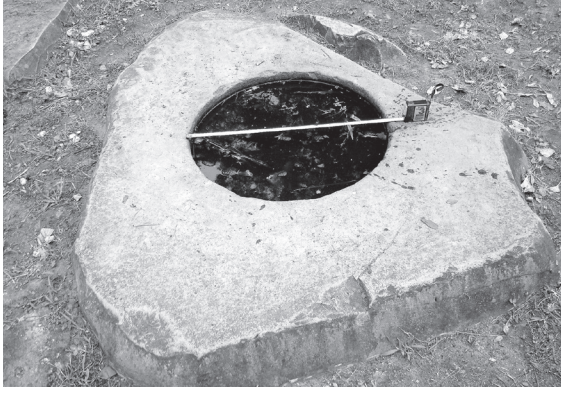
い。また直径30cm程度の柱が乗っていた痕跡が分かるものもある。

当時の建物で一般的なものは、掘立柱建物である。地面に穴を掘り、そこに直接柱を埋め込むため柱は腐りやすいが、一代限りの建物としては、建て易く費用も掛らなかつたことだろう。粗末な建物のことを「掘

立小屋」などと呼ぶのは、その名残である。

それに対して最も格の高い建物は、土台石を持つ建物といえる。石を切り出さなければならず費用はかさむが、柱が石の上に乗るため腐食しにくい。現在まで残る神社仏閣は、全てがこの技法によって建てられている。

すなわち黒岩の巨石群は、神社仏閣に用いられた土台石であり、その大きさと数から、巨大な建物が何棟かあったと推定される。そして伝承からは、神社というよりもお寺であったと考えるのが妥当であろう。



多賀城廃寺跡の心礎

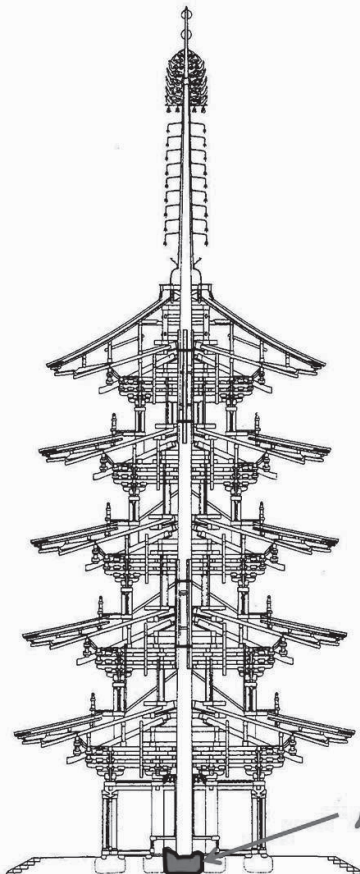
心礎

その土台石の中に、30^{センチ}ほどの穴が掘られている変わった石がある。地元では、鳥居を建てたものだという言い伝えもあるようだが、木の鳥居であればそこに水が貯まって腐ってしまうし、石の鳥居であれば残骸があつてしかるべきなのではない。そして何よりも対になる同様の石がないし、さらに鳥居を建てたものにしては大きすぎる。

この石に対して考えられるのは、一つしかない。それは、三重塔や五重塔の心柱を支えた土台石、すなわち心礎であるというもの。塔があつたことが発掘調査によって判明した多賀城廃寺跡の塔の心礎にも、同様の穴が掘られている。つまり黒岩には、三重塔のような巨大な塔が建っていたのである。

いつ建てられたものか

最後に考えなければならぬのが、これらのお寺がいつ建てられたのかということ。周辺からは9世紀〜12世紀の土器などが発見されているし、12世紀前後の仏像などもある。9世紀であれば、国見山廃寺跡



心礎

源島正士「京都醍醐寺五重塔」『日本仏塔集成』(中央公論美術出版より)

よりも前となり、11世紀なら国見山廃寺跡に続くものと考えるのが一般的だろうし、12世紀となれば平泉と同時代となる。結論は、発掘調査などの結果を待たなければならぬが、年代観を含めその全容が明らかになるならば、世紀の発見となることは疑いない。

おわりに

塔を有する寺院は、平安時代に限つていえば、この周辺では東北の中心であった多賀城市近隣と国見山廃寺跡、平泉中尊寺にしかない。つ

まり黒岩には、そのような重要なお寺が存在したのである。どのような背景で造られ、従事していた人はどこにいたのかなど、興味は尽きない。現在、まったく意識されていない地域だけに、衝撃を受ける人は、おそらく少なくないだろう。

最初に展勝地との位置を記したのは、国見山廃寺跡との関係を暗示するためであった。北上の成り立ちをさらにひも解く謎、白山廃寺跡の調査に、本年度から市埋蔵文化財センターによってメスが入る。平泉文化の解明という点からも、大いに期待したい。